

抗がん剤治療の脱毛対策

美容のプロにお任せあれ

抗がん剤治療を受けるがん患者にとって、副作用で起きる脱毛は深刻な問題だ。脱毛による外観の変化はストレスとなり、日常生活に支障を来す。医療関係者のケアがあまり行き届かない分野で、美容師やエステティシャンら美容の専門家が患者のサポートに一役買っている。

患者を支える

仙台市宮城野区の主婦

(62)は2年前、乳がんの摘出手術を受けた。医師の薦めで、術後に抗がん剤治療を受けることに。がんは進行していなかったが、副作用で髪の毛などが抜けることが心配だった。

美容のために通っていたエステサロンのスタッフが力になってくれた。

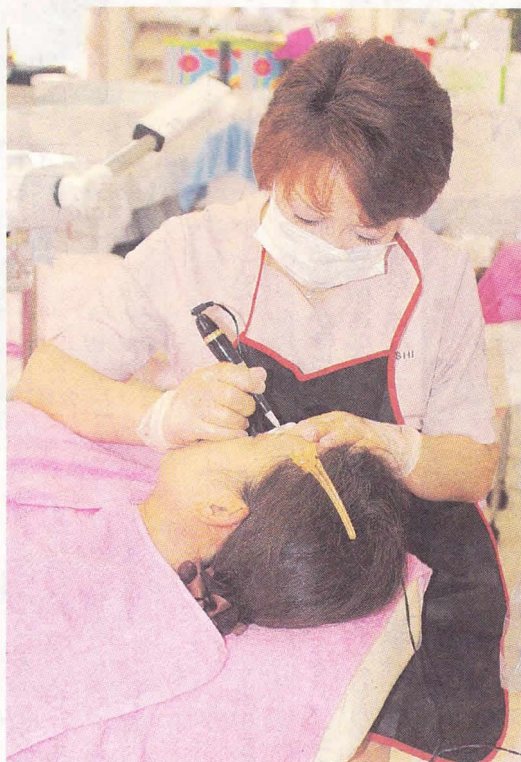
当時の髪形に合うかつらを選んでもらい、表皮のごく浅い部分に色素を入れる「マイクロピグメンテーション」と呼ばれる特殊な技術でまゆ毛を描いてもらった。

抗がん剤治療を受けた半年間、外出する時はかつらを付けて過ごした。「まゆげも自分で描くより形がきれいだった。周りの目を気にせず、過ごすことができた」と主婦は振り返る。

「脱毛で外観がかわってしまふ患者のショックは大きく、切実だ」。主

特殊技術でまゆ美しく

婦が通ったサロンを経営する西椋子(まさこ)さん(60)は宮城県七ヶ浜町。西さんは宮城県内で唯一、米国のマイクロピグメンテーション協会が認定するインストラクター資格を持つ。5年前から病院から紹介されるなどしたががん患者に、一般客の半額で施術している。



これまでで施術した患者は約200人になる。「専門的な技術を使えば、違和感なく脱毛をカムフラージュできる。患者の表情も明るくなる」と西さんは話す。

国立病院機構仙台医療センター(宮城野区)は2005年7月から毎月1回、抗がん剤治療を受けるがん患者に、化粧法

看護師や薬剤師のほか、美容師や美容学校の講師らが指南役を務める。西さんも08年秋ごろから3年間、ボランティアで指導にあたった。同センター外科医長の渡辺隆紀医師(48)は「美

マイクロピグメンテーションの施術を手掛ける西さん(生活文化部・時井大祐

容について医療関係者は素人。患者のニーズは多様で、専門家の知識や技術を生かせば、幅広くケアができる」と話す。

渡辺医師によると、乳がんや婦人科系のがんの治療に使った抗がん剤は副作用で脱毛を伴うものが多くという。近年は抗がん剤の有効性が高まり、主に術後の再発防止のため、抗がん剤を使うケースが増えている。

「抗がん剤治療を始める前に、患者が安心して治療に臨めるよう、病院として脱毛の副作用に対処するシステムが必要だ」と渡辺医師は訴える。